



HAL
open science

Translation into french of Kyôka (comic poem) from the ”Trésor de l’estampes japonaise SURIMONO

Yumiko Takagi

► **To cite this version:**

Yumiko Takagi. Translation into french of Kyôka (comic poem) from the ”Trésor de l’estampes japonaise SURIMONO. Tôyô Kenkyû , 2020. hal-03119393

HAL Id: hal-03119393

<https://hal.science/hal-03119393v1>

Submitted on 23 Jan 2021

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L’archive ouverte pluridisciplinaire **HAL**, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d’enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

『東洋研究』第二十六号八抜刷▽
令和二年七月二十五日
大東文化大学東洋研究所

狂歌と出典

—「Trésors de l'estampe japonaise SURIMONO(日本浮世絵版画の至宝 摺物)」
における狂歌の翻訳をめぐって—

高 木 ゆみ子

狂歌と出典

—「Trésors de l'estampe japonaise SURIMONO (日本浮世絵版画の至宝 摺物)」
における狂歌の翻訳をめぐって—

高 木 ゆみ子

はじめに

一、『摺物』にみる狂歌

二、古典との関連性

むすび

はじめに

筆者は、二〇一九年二月よりパリ在住美術収集家ジョルジュ・レスコヴィッチ [Jerzy Leskiewicz] 氏蒐集の摺物の出版「Trésors de l'estampe japonaise SURIMONO (『日本浮世絵版画の至宝 摺物』) (以下『摺物』と略称^①)」の

出版に携わった。筆者の担当は、摺物の画面上の狂歌等詩歌のフランス語訳とそれに伴って必要な場合の翻刻であった。解説はジュヌスヴィエーヴ・アイトケン Geneviève Aitken 女史、年代・画師・工房・連・揃い物の名称等の確認、原本に表題のない場合の表題の命名等の統括は、河金俊子女史の担当となった。

翻訳に際し、いくつかの問題点、時には解決不可能な点も出てきた。日本もしくは東洋特有の風習、例えば干支・恵方参り・小松引きなどは、解説に依存する部分もあった。

さらに困難であったのは、古典に準拠した作品であった。狂歌が掛詞・本歌取り・見立て等で、重層的な意味を持ち、日本や中国の古典を背景にしている場合は、そのすべての意味をフランス語の訳に反映することは不可能であった。しかし、対応するフランス語の選定以前の問題として訳そうとする狂歌が、少なくとも出典といかに関連しているかという点を考察することが必要となった。

そこで、拙稿では『摺物』所収の作品について、その一部を古典との関係において紹介してみたい。

もとより対象が個人蒐集品の一部ということで、本稿は摺物の狂歌全般についての考察ではないことを、最初にことわっておきたい。

今回の出版に際しては、レスコヴィツチ氏の蒐集品の中から165枚の作品が精選された。詩歌作品のない絵画のみの作品が5枚⁽²⁾、番組表が5枚⁽³⁾。画面上から判読の困難なものを除いて154枚、334首の詩歌作品が翻訳の対象となった。摺物の図柄に伴って印刷されている作品のほとんどが狂歌であるが、漢詩・旋頭歌・俳諧も少数入っている。

一枚の摺物に、一首から数首の狂歌、漢詩・旋頭歌・俳句等が書き込まれている場合も多く、翻訳に際しては、

紙面の都合もあり極端に数の多い場合に限って、その一部のみを撰んで訳すこととなった。^④

一、『摺物』にみる狂歌

摺物とは、木版による印刷物の総称であるが、特に江戸時代、非売品として贈答用に製作された豪華版の木版画を指す。

一般に摺物の注文主が狂歌師である場合には、画面に図柄のみではなく狂歌の入る場合が多い。一狂歌師が個人で注文する場合と、^⑤数人特に「連」と呼ばれる集団で注文している場合とがある。「連」の場合には、狂歌の宗匠として中心となる代表者の周囲に複数の狂歌師が集まり、自費出版として当時評判の絵師に発注し、完成した作品は仲間内で配ることとなる。^⑥この経緯は『摺物』所収作品においても同様と思われる。

富裕な町人層や武士達が注文する摺物は、採算を考慮にいれないため印刷にも精緻な技巧を凝らしている。空摺りによる起伏、暈かし、金銀粉も使用した多色摺りの錦絵等である。商売用の浮世絵と異なり、部数も五十部から百部ほどに限定されている。殆どがほぼ20cm四方の正方形の色紙版である。中には横中版や長版と呼ばれる横長の版、まれに上下二枚続きで縦長の形も含まれる。^⑧また番組表の場合は、一度上下に二つ折りしてからさらに横に折り畳むため、上側の画面と下側の文字部分とが逆さまに印刷されている。

図柄は一枚だけで完結する例がほとんどであるが、中には、同じ題材の画面を数枚に分けて組合せとなっているものがある。^⑨また、より頻繁に見られる形式としては、揃物として同じ主題で、題材内容を変えて一揃いとして制

作された作品群もある。『摺物』にその一部が所収されている作品では、後述する岳亭春信画「本朝二十四孝」、葛飾北斎画「元禄歌仙貝合」^⑩「馬尽くし」^⑪などがあげられる。

どちらの場合も絵師は、全て同一人物である。

このように趣味性が強いことから、社会的にも経済的にも繁栄した宝暦十年（一七六〇）頃から、天保（一八三〇—一八四三）・弘化（一八四四—一八四七）年間までほぼ百年間に質量とも最も盛んに創作され、その後衰退していった。

内容は、摺物発展の契機となった絵暦、新春の挨拶（歳旦摺物）、商品宣伝、遊郭・遊女評判、歌舞伎役者等の襲名披露挨拶状、役者似顔絵、浄瑠璃その他歌舞演芸などの番組表等多岐にわたっている。

ここで、摺物の画面と狂歌（漢詩・旋頭歌等）の関係について触れておきたい。

両者は、きわめて密接に結びついている例もあれば、ほとんど繋がりが見つけられない例もある。狂歌が数首記されている場合では、そのうちの一首により近い図柄、もしくは全体に共通の図柄となる。

摺物全体の中でも大きな割合をしめる歌舞伎役者を図柄とした場合には、役者への賛辞が主題となっているため、関連づけは比較的容易である。ただし、画面の歌舞伎の題名と狂歌とが一致しない場合もあり得る。本稿では、歌舞伎に関連した作品は、考察の対象としなかった。『摺物』に収録されている歌舞伎関係の作品の一覧を本稿末の注に掲げるのみとした。^⑫

狂歌師の名は、すべて号である。その一部だけの場合、庵号・齋号などを伴ってすべて掲載する場合が両用されている。『摺物』の狂歌師の多くは、比較的無名に近いようである。尤も連の中心となるような代表的な人物、四

方歌垣真顔・森羅亭萬象・秋長堂物築・芍薬亭長根等も含まれていないわけではない。本稿では、狂歌の作者名は、狂歌の後に作品の記載通りとした。

また各作品については、『摺物』の体裁にしたがい、作品は画師の名を冠し、原本の表題をカギ括弧で、原本に表題が無い場合は『摺物』編集に際し新たに選定された表題を角括弧で示した。

『摺物』所収作品の絵師は、以下の全二十六名である。

- ・ 溪斎英泉 (1790—1848) 活動時期1810—1820)
- ・ 菊川英山 (1787—1867)
- ・ 八島岳亭または岳亭春信 (1786頃—1868) 活動時期1815—1852)
- ・ 砂山五清 (活動時期 1810—1820)
- ・ 歌川広重 (1797—1858) 活動時期1814以降)
- ・ 魚屋北溪 (1780—1850) 活動時期1799以降)
- ・ 蹄齋北馬 (1771—1844) 活動時期1798—1842)
- ・ 葛飾北斎 (1760—1849) 活動時期1799以降)
- ・ 葵岡溪栖 (1818—1844) 活動時期1832以降)
- ・ 鳥居清長 (1752—1815)
- ・ 歌川國丸 (1794—1829)
- ・ 歌川国貞 (1786—1864) 活動時期1807以降)

- ・歌川国芳 (1797—1801)
- ・歌川貞景 (活動時期 1818頃—1844)
- ・柳川重信 (1787頃—1832)
- ・二代 柳川重信 (活動時期 1824—1860)
- ・柳々居辰斎 (1764頃—1830) 活動時期 1799—1823)
- ・勝川春英 (1762—1819)
- ・二代 速水春暁斎 (?—1868)
- ・窪俊満 (1757—1820) 活動時期 1780以降)
- ・勝川春亭 (1770—1820)
- ・菱川宗理 (活動時期 1797—1813)
- ・二代 葛飾戴斗 (活動時期 1810頃—1853)
- ・歌川豊廣 (1773—1829)
- ・歌川豊国 (1769—1825) 活動時期 1786以降)
- ・凌雲亭和海 (?—?)

二、古典との関連性

『摺物』所収作品にみられる狂歌その他詩歌作品と古典との関連を、仮に以下のような観点から考察してみたい。

○ 古典から題材をとっている。

出典とした古典を摺物の表題として明示している。

狂歌も図柄もその内容に忠実に添っている場合。

狂歌は古典の内容と関連性が薄いか見いだせないが、図柄は忠実である場合。

狂歌は古典の内容と一致しているが、図柄は忠実でない場合。

古典の内容には狂歌も図柄も関係はない場合。

出典とした古典を明示していない。

○ 本歌取り。

○ 特定の古典を指定できないが、宮廷文化への憧れが背景となっていると見られる作品群。

なお、以上古典に関連した『摺物』所収の作品は、図柄の上からは、次のように分類できる。

○ 摺物の作られた時代（江戸時代）の衣装・風俗で人物等が描かれている。

○ 題材となった古典の時代の人物の衣装・風俗で描かれている。

（これは必ずしも平安朝や鎌倉時代、中国古代等出典作品の背景となっている時代のの衣装・風俗の再現という訳ではない。江戸時代に想像されていた当該時代の衣装・風俗の意である。）

ただし図象的な分析は、筆者の任では無いため最小限に留めたいと思う。

岳亭春信画「本朝二十四孝」と狂歌

古典から題材をとり、出典した古典がそのまま摺物の表題に明記されている揃え物の例として、まず岳亭春信画「本朝二十四孝」をあげられる。岳亭春信は、八島岳亭の画号の一つである。

これは、本丁連による春興狂歌摺物。文政年間（一八一八—一八三〇）前期製作。本丁連の最初の主宰者は大家裏住であるが、彼の名は本連作に見いだせない。また本丁連の主宰者が引き継ぐとされる屋の字を鳥兼が名乗っていることから、おそらく本作製作当時は、萩の屋鳥兼が代表者と思われる。揃物の題となっている「本朝」は「本丁」にも通じ、類似の揃物「葛飾二十四将」同様、連の名前とみることもできる。

『摺物』には、「丸部臣明磨 続日本後紀」・「久我太政大臣 古今著聞集」・「大江拳周 著聞集」・「舞女微妙 東鑑」・「本間資忠 太平記」・「鎌倉孝子 沙石集」・「楠帯刀正行 太平記」の七枚が収められている。¹⁴（以下仮に（一）から（七）まで番号を付ける。）

（一）丸部臣明磨 『続日本後紀』（図1）

春雨のめぐみをうけて青柳のみとりいやます孝屋のかけ 梶の屋成津良

春くれ八角も丸部にむつましく親にみせたき今朝の若柳 玉章舎文庫

（二）久我太政大臣 『古今著聞集』（図2）

もも敷の大宮人も鶯のうたにせはしき春のこのころ 紀楽住



図1 岳亭春信 「本朝二十四孝 丸部臣明麿」



図2 岳亭春信 「本朝二十四孝 久我太政大臣」

(三) 大江挙周 『著聞集』

若松も老たる松もみとりしてかハラぬはるとなるそめてたき 宇津の屋卷方

(四) 舞女微妙 『東鑑』(図3)

うららさに蝶は羽袖をかへしては舞つゝしたふ花のかそいる 萩の屋鳥兼

(五) 鎌倉孝子 『沙石集』

ゆつたりとたつ春の日の長はかまひけるかすみの糸のしつけき 磯の屋直成

(六) 本間資忠 『太平記』

先陣にたちしかすみもつはものやはつ日かけそふ赤坂の城 左祝亭喜樽

(七) 楠帯刀正行 『太平記』(図4)

春かすみたちし姿もよしの山ひときハめたつ花の若武者 竹の屋虎住

七人の孝子の出典による概略は以下となる。

(一) 『続日本後記』仁明天皇の嘉祥元年(八四八)十月条によると、丸部明麻呂は四位を賜り終身田租を免除された。彼は讃岐國三野郡丸部己酉成の子であったが、十八歳で京にのぼり功労多く、本郡の大領に任じられるところを固辞して父親に譲り孝養を尽くした。父母が老衰に及べば、その住いから十里ばかり離れていたにもかかわらず、常に通って世話をしていた。その孝行による昇進賞与であったとされる。

狂歌第一首には「孝屋」、第二首には「丸部」とそれぞれ主題に添った句をいれ、二首とも季節は春としている。丸部は本来「わにべ」と読んだが、第二首の「角を丸部に」は、「まる」の意を含んでいる。図柄は、老夫婦のい

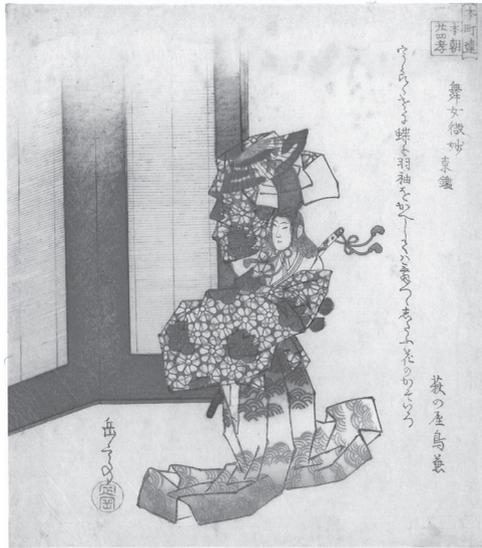


図3 岳亭春信「本朝二十四孝 舞女微妙」



図4 岳亭春信「本朝二十四孝 楠帯刀正行」

る家屋を遠景に、明麻呂を前景に描いている。

(二) 久我大相國源雅実(一〇五九―一二二七)は、村上源氏氏長者。六条右大臣源顕房と中納言源隆俊女の嫡男。実妹賢子が白河天皇中宮として寵を受け、堀河天皇生母となったことから、太政大臣にまで登り院政期白河・堀河宮中において重きをなした。その幼少時の逸話である。

『古今著聞集』卷第八孝行恩愛第十「久我大相國雅実幼少の時外祖父の杳を懐中の事」

六条右大臣、隆俊中納言と大内を見ありき給けるに、大内には子孫の殿上人を具せざる人は、はだしにて庭をあゆむところあんなるに、久我大相國幼少の時、兩人の杳を海中して彼所にてはかせられたりけり。幼少の人、外祖父をも思ひすてられざりけること、ありがたき事也。隆俊卿感涙を流して、母儀のもとに行て、悦申されけるとなん。

狂歌は、杳を揃えて呈する雅実には直接触れておらず、独立して觀賞できる。典拠を知ることにより、鶯の聲に春の訪れを知り、庭に降り立とうとする二人連れの大内人に、六条右大臣顕房と隆俊卿の姿を重ね得る。画面は、童姿の雅実が、烏帽子姿の二人の貴族に二足目の杳を揃えようとしているところである。左側のやや年輩の貴族が隆俊であろう。

なおこの逸話の背景には、平安中期母方に重きのあつた頃と異なり、江戸時代も続いていた父系尊重の始まる社会的変化も窺える。¹⁵⁾

(三) 大江拳周(？―一〇四六)は、文章博士大江匡衡男。母は赤染衛門である。

『古今著聞集』卷第五和歌第六「大江拳周赤染衛門の歌によりて病癒ゆる事」

江挙周、和泉の任さりてのち、病おもかりけり。住よしの御たたりのよしをき、て、母赤染衛門、大隅守赤染時用女、或順女云々。

かはらむといのる命はおしからでさてもわかれんことぞかなしき

とよみて、みてぐらにかきて彼社にたてまつりければ、その夜夢に白髪のお翁ありて、この弊をとるとみて病いへぬ。

狂歌は、赤染衛門の「かはらむ」に応じる形で「かはらぬ」とあり、大江家が長く遊びをしめしている。

この後母赤染衛門が自らの命を捧げてでも自分を救おうとしたと知った挙周が、今度は、母を救う為に住吉神社に参籠したという後日談がある。母子の想いに感じた住吉の神のおかげで、二人は共につつがなく過ごすことができた。狂歌中の「老いたる松も若松も」とは、赤染衛門と挙周を指すとも解される。また文章道の家という意識からであれば、老松は大江巨衡、若松はその子大江挙周を指していると見てよい。凶柄は、住吉大社の太鼓橋、松林、前景には一本の松のもとに佇む烏帽子狩衣の貴人の姿である。

(四) 舞女微妙は、鎌倉時代冤罪を蒙り、東北に流された父親の消息を知るために東に下り、將軍頼家の前で舞い、その沙汰により父親の最後を知ることのできた孝女である。『東鑑』卷十七建仁二年(一一〇五)条には、以下の記述がある。

三月小 八日癸丑。御所御鞞。此會連日礪也。其後入御于比企判官能員之宅。庭樹花盛之間、兼啓案内之故也。

爰有自京都下向舞女。号微妙。孟酌之際 被召出之、歌舞盡曲 金吾頗感給之、延尉申云、此舞女依有愁訴旨 凌山河参向、早直前被尋聞食者、金吾令尋其旨給之處、彼女落涙数行、無左右不出詞、恩問及度度之間、申云、

夫建久年中、父右兵衛尉為成、依不人讒為官人被禁獄。而以西国囚人、為給奥州夷、被放遣之、將軍家雜色請取下向畢。為成在其中。母不堪愁歎卒去。其時我七歲也。無兄弟昵懇。多年沉孤独之恨、漸長大之今、恋慕切之故、為知彼存亡、始憤當道、而赴東路云々。聞之輩悉催悲淚。速遣御使於奥州可被尋仰之由、有其沙汰。

狂歌は、蝶が花をかそいろ（父母）として慕って舞うという内容で、微妙は蝶に見立てられている。出典との関連は、この見立てに依っている。図柄は、烏帽子を付けた舞女が袖を翳して踊る姿を描き、衣装はともかく出典の内容に忠実であるといえよう。

なお『東鑑』によると、微妙には、後日談があり、孝女談というほかに、若い女性の出家遁世談ともなっている。乃ち、この後三月十五日には、微妙は頼家の母尼御前北条政子の前で舞い、政子に深く称揚された。

八月五日、奥州に出していた使いが戻り微妙の父為成は既に死亡していることが伝えられた。同月十五日、微妙は、悲嘆のあまり榮西律師の禅坊で出家した。此れを哀れんだ政子は、自らの所領の一部を与えた。一方、微妙には、古郡左衛門尉保忠が通っていたが、微妙の出家は保忠が甲斐國に下っている間のことであった。廿四日戻って来た保忠は、事の次第に憤り禅坊に乱暴を働いたが、二十七日に叱責された。微妙の出家の導師となった榮西は、政子の帰依を受けており、榮西も微妙も庇護されていたからとされる。¹⁶⁾

(五)「鎌倉孝子」は、將軍頼家の代の母子の話である。一人の母が子に打擲されたと一度は訴え、それを冤罪にも関わらず子が受け入れたため、その訴えを取り下げた。子は事実が判明した際に、「母親が虚偽の訴えで責められないがために」と、あえて重罪を受入れた理由を語った。ただし、『摺物』所収の作品では、図柄も狂歌も、この母子の逸話との関連性を見いだすことは、困難である。画面前方に狂歌の「長袴」に対応して、長袴を履いた武士

とその前に平頭する武士が描かれている。

(六) 本間資忠は、『太平記』巻六「赤坂合戦事付人見本間拔懸事」に語られる若武者である。北朝側の本間九郎資貞は、老兵人見四郎入道恩阿とともに、楠正成の守る赤坂城へ禁じられていたにも関わらず拔駆けをして果てた。両者に随っていた僧侶から父の首級を受けとった資貞嫡男資忠は、すぐさま父の後を追おうとし、一度は僧侶に諭されて決心を翻したかにみえたが、結局父の弔いをして、赤坂城へ駆けつけて果てる。

その途上大坂四天王寺の石の鳥居の右の柱に、右の小指を喰切つてその血で一首を書き付けた。

マテシバシ子ヲ思フ闇ニ迷フラン六ノ街ノ道シルベセン

相模國ノ住人本間九郎資貞嫡子、源内兵衛資忠生年十八歳、正慶二年仲春二日、父ガ死骸ヲ枕ニシテ、同戰場ニ命ヲ止メ畢ヌ

摺物の狂歌には、初句に「せんじん」、資忠を暗示する「つわもの」さらに当時、「太平記」読み等で民間に広く知られていた「赤坂の城」の語が使用されている。『太平記』では仲春二月のこととされているが、「はつ日かけ」により新春の意が含まれている。また「赤坂合戦事付人見本間拔懸事」では「マダ宵ヨリ打立ッテ」「朝霧ノ晴レ間ヨリ」「早旦ヨリ向テ名乗レドモ」「今朝此城ニ向テ打死シテ候ツル」等々、早朝の時刻が強調され、狂歌もそれに準じていると思われる。図柄は、遠景に赤坂城を望み、手前に石の鳥居、若武者を画き、『太平記』の記述に忠実である。

(七) 忠臣楠政成男正行は、父の戦死した湊川の戦い当時は、十一才(十三才とも)で合戦に加わることができなかったが、亡父の遺命(『太平記』「桜井の別れ」)を守り、成人の後は南朝方として河内を中心に奮戦していた。

『太平記』卷二十六 「正行参吉野事」には、次のように記される。

京勢如雲霞淀・八幡二著ヌト聞ヘシカバ、楠帶刀正行・舎弟正時一族打連テ、十二月廿七日芳野ノ皇居ニ参ジ
(後略)

住吉合戦に勝利を得たあと、北朝の反撃を控え貞和三年(一三四七)暮、舎弟正時とともに南朝吉野に参じ後村上天皇に最後の暇乞いをする。ついで政行は、後醍醐天皇陵へ参拝し、如意輪堂に詣で扉に次の時世の歌を鉄で刻んだ。(歌では「入る」と「射る」が掛詞となっている。)

かえらじとかねておもえば梓弓なきあとに入る名をぞとどむる

正行は、更に髻を切つて仏殿に投げ入れ覚悟を示し、直ちに吉野を降り敵陣へ向かった。

続く「四条繩手合戦事付上山討死事」には、翌年正月五日四条繩手(現大阪)の合戦で、北朝室町幕府高師直・師泰兄弟の大軍を相手に奮戦する正行の姿が活写される。正行は師直の身代わりとなって討たれた上山六郎左衛門を敵ながらも称賛する情けを知る武士として描かれている。同日「楠正行最期事」において、正行は正時と刺し違えて果てる。享年二十二歳とされる。

摺物興盛以前、すでに正保二年(一六四五)大運院陽翁法華法印日応『太平記評判秘伝理尽鈔』著は楠流兵法の基本書として武士の間に広まっていた。『太平記』自体も、貞享(元禄年間(一六八四〜一七〇四))には、太平記読みによって盛んに講釈され、(六)の資忠の物語も含め赤坂城攻防等一連の楠正成・正行の物語は、民間にも広く知られていたと思われる。また『太平記』の後を受けて、講釈により民間に評判を博した『太閤記』卷十六にも、天正十年(一五八二)二月末の豊臣秀吉の吉野観桜の段で、吉野・桜・武士が関連して登場する。

花は桜木人は武士とは誰がいい初めし言の葉ぞ・・・(中略)・・・

さてその翌日又山上の花をめぐり見て、上の蔵王堂にて読める歌、

かへらじとおもふ家路を入あひの鐘こそ花のうらみなりけれ

山田孝雄著『櫻史』の校訳において山田忠雄氏は、上記豊臣秀吉の歌を以下のように正行と関連づけて解説する。¹⁷⁾

「帰らじと兼ねておもへば」の歌を此の堂に遺して壮烈な討死を遂げた彼の正行の遺跡を偲び、天下の名花を目のあたりにすると、もう家に帰ろうという気持がなくなってしまふ。

摺物の流行った時代には、狂歌におけるように「春かすみたつ」「吉野」「花(の若武者)」と楠正行を示す背景ができていたのであろう。

図柄には、実際には桜の咲く季節とはいえない歳末が舞台となる『太平記』の記述とは異なり、空摺の技術で満開の櫻が浮き上がって見える。

江戸時代には、中国元代郭居敬編纂『二十四孝』が仮名草紙として普及しており、それにならった浅井了意(？)——一六九一)編『大倭二十四孝』が二十四卷十二冊で寛文五年(一六六五)刊行された。同書は、元禄十一年(一六九八)再刊、菱川師宣挿画の別版も出た。還俗したとはいえ僧侶であった浅井了意に対し、儒学の立場からも朱子学者藤井懶齋(一六二八—一七〇九)が、貞享元年(一六八四)『本朝孝子伝』を、漢文体で刊行した。狩野永敬(一六六二—一七〇二)による半丁一図当ての挿図も入り、巻末には出典となった古典名も掲げている。本作品は、好評につき貞享四年(一六八七)には漢文体を仮名に改めた『仮名本本朝孝子伝』として出版され、一層普及した。摺物が

盛んとなるほぼ一世紀前から、孝子伝は、文章と絵において広く称揚されていたのである。

『摺物』に収録されている本朝連による春興狂歌摺物「本朝二十四孝」も、この一連に位置づけられる。狂歌も凶柄も表題の古典に準拠している場合がほとんどである。ただし、引用した狂歌には、すべて「春興」として祝意がこめられていることが指摘されよう。そのため独立した観賞、随って翻訳も可能となっている。

『枕草紙』・『源氏物語』・『平家物語』と狂歌

『摺物』所収作品の狂歌には、代表的な日本の古典『源氏物語』・『枕草紙』・『平家物語』も出典作品となっている。ただし、狂歌・凶柄との関連性は、同じ作品においても異なっている。

まず『枕草紙』に関連する三枚の摺物を紹介する。

・魚屋北溪画「官女と鶏」(図5)

消えのこるみねの白雪花と見てを簾をかかくる春のあけほの 春園三千蔭

逢坂の関の鶏羽たきてうたへはこゆるはるのはつ風 篤垣志薦

表題は、原本にはなく凶柄から付けられたものである。

狂歌第一首は『枕草紙』第二八〇段「雪のいとたかう降たるを」に基づいている。この段自体が、周知のように『和漢朗詠集』山家にも所収され平安貴族になじみの深かった『白氏文集』十六の詩「香炉峯下」の次の対句を眼目としている。

遺愛寺鐘欹枕聴、香炉峯雪撥簾看



図5 魚屋北溪 「官女と鶏」

また、第五句「春のあけほの」は、同じ『枕草紙』冒頭「春はあけほの」を引いていることは明白である。

第二首の本歌は、『後拾遺集』雑二902『百人一首』所収歌。

(本歌) よを込めて鳥のそらねははかるともよにおおさ
かの関はゆるさじ 清少納言

清少納言の本歌自体が、『史記』における孟嘗君の函谷関の故事に準拠している。

『後拾遺集』詞書きによれば、大納言行成に「越えることはできない」と答えた逢坂の関を、春風が越えることにより、狂歌に不可欠な春興の意が込められている

上記の例に反して原本に古典としての『枕草紙』を表題としているが、狂歌や図柄がその出典作の内容には関係はない場合がある。

以下二例は、『枕草子』の内容には触れず、「ものつくし」という形式を真似している。

・蹄齋北馬画「白拍子の舞」

「枕草紙」めてたきもの からにしき かさりたち

すこもりのとこやみもはや明わたる神代の春の初とりの聲

菅笠園静枝

廻文

咲るから草むらをすら此花はもこらずをらむさくらかるけさ

随日園勝長

「白拍子の舞」は、『摺物』編集過程で付けられた表題である。原本には、『枕草紙』の印があり、揃物の内の一枚と思われる。『枕草子』第八十四段冒頭「めでたき物 唐錦 かざり太刀」をそのまま表題としている。

しかし、第一首の狂歌は、寧ろ神代を歌い、表題とは直接関係がなく、むしろ前記『百人一首』撰入の清少納言の歌を思わせる。また第二首は、廻文で歌の先頭から読んでも最後から読んでも同じとなる技巧的な作である。仏訳には、表すことが不可能であった。これに対し図柄は、表題に相応しく飾り太刀を帯び唐錦を纏った舞女の姿を描いている。

・魚屋北溪画「枕草紙」[ことごととなるもの 福引に出す景物] (図6)

ふく引にふととり得たるお多福やふえをふかせてふりもよく舞ふ 宝館福住

おもしろく笑ふ門にハふくひきの縄にもよりをかけてとらせん 杜の屋仲貫

二首の狂歌は、どちらもさまざまなものとして福引きにでてくる景品を歌っている。図柄も俯せて置いたお多福の面、笥迫、舞扇とおぼしき物等である。表題の「ことごととなるもの」は現存する『枕草紙』には、みあたらない。

二首の狂歌と図柄とが、三者密接に繋がりつつ、古典の内容とは直接関係のない例である。

このように『枕草子』の場合には、その形式「ものつくし」が、狂歌に適して利用されている。



図6 魚屋北溪 「枕草子」

『摺物』には、表題に明記されていないが、『源氏物語』を示唆していると思われる作品が三作含まれる。

・魚屋北溪画「上東門院」(図7)

花ひらのいつ、きぬきし梅かえにはつ日の匂ふ山の

腰かな 竜雲園梅房

ものかたりつくれとあたをつみにして代々に花さく

藤式部かな 竜花園梅間

鶯のまろはず玉の春の葉をたけのそうふにたてまつ

れかし 連日菴梅員

原本は紫式部の仕えた上東門院の名を題としているが、狂歌三首のうち第二首は、明らかに紫式部(藤式部)自身と『源氏物語』(物語)を示唆している。上の句「ものかたりつくれとあたをつみにして」は、狂言綺語、源氏供養という江戸時代の思想を反映しているかとも想われるが、なお検討を要するであろう。第一首の「いつつ衣」第三首の「竹の園生」も宮中を暗示している。

図柄は、十二単を纏った官女の立姿である。



図7 魚屋北溪 「上東門院」

・魚屋北溪画「若菜」(図8)

伽羅の香をとめしえいをえてよめる若菜の巻は上下
もあり 芝廼門真種

小簾もれてにほふ初音の玉かつら梅かやしなふ庭の
うくひす 清明亭本蓮

『源氏物語』の巻の名「若菜」「初音」「玉かつら」を詠みこんでいる。第一首は「若菜」は、三十四帖三十五帖と上下二巻となつてしていると記す。第二首の「梅がやしなふ庭のうくひす」とは、光源氏に養われた玉鬘を暗示しているのであろうか。図柄は、三方を前に座した男と、彼に対して裳を引いて座る女の後ろ姿である。二首の狂歌に添えられた源氏香図は、「若菜」にあたる。

上記二例が、宮中の女房装束を図柄としているのに対し、次の作品は江戸時代の女性の姿である。

・歌川国貞画「芸者とわらび」(図9)

式部てふ名をそしのふの擦衣紫染る春のさわらひ
和竹亭素直



図8 魚屋北溪 「若菜」

若草のもゆる中にも紫の色をそわきてめつる早蕨

東川亭義成

指入る、墅への早蕨すりぬらん紫匂ふ君が袖には

東光園秀丸

原本には表題のない作品であるが、第一首冒頭の「式部」と三首に共通している紫から紫式部の名を、また第二首の「若草」と「紫」からは、若紫もしくは紫の上を、さらに三首共通の早蕨から『源氏物語』第四十八帖「早蕨」巻が容易に喚起される。ただし「早蕨」巻は、宇治から匂宮に引き取られて都住まいをする中の宮が中心となっている。『源氏物語』の内容とは、齟齬する狂歌である。図柄も、裸足に下駄履きの江戸時代の女性が、蕨を摘んで歩く姿である。

以上三作品は、『源氏物語』に示唆を受けているが、その表現は、必ずしも物語の内容に密接に繋がっていない。江戸時代の『源氏物語』享受を背景として、さらなる考察が必要とされるであろう。



図9 歌川国貞 「芸者とわらび」

『摺物』所収作品のうち、『平家物語』を出典としてい
 ると思われる作品は、次である。

・二代速水春暁斎画「人形に箱」(図10)

えひしれてくたまく客をとめ子とともに笑へる雛
 たなの桃 松千代女

雛のたな林間ならぬ桃のもとにならひし衛士は白酒
 やくむ 霍廼屋

原本に表題のついていない作品である。二首の狂歌の
 うち第二首は、『和漢朗詠集上』「秋興」の白楽天の詩を
 想起させる。

林間煖酒焼紅葉 石上題詩掃緑苔

さらに『平家物語』『平家六之巻紅葉』の段で、高倉
 天皇が賞翫していた紅葉の落ち葉や枝等を殿守のとも
 みやつこが、すっかり掃き清め酒を温める薪としてし
 まったことを咎めず、却って御感あったという挿話も出
 典として考えられる。

さんぬる承安の比おひ、ご在位のはじめつかた、御



図10 二代目速水春暁「人形に箱」

年十歳ばかりにや給ひけん、あまりの紅葉を愛させたまひて北の陣に小山をつかせ、はじ・かへでの色うつくしうもみぢたるをうへさせて、紅葉の山となづけて終日観覧あるに、なほあきだらはせ給わず。しかるをある夜、野分はしたなうふきて紅葉みな吹ちらし、落葉すこぶる狼藉なり。殿守のとものみやづ子朝ぎよめすとて、是をことどくはきすててげり。のこれる枝、ちれる木はをかきあつめて、風すさまじかりける朝なれば、縫殿の陣にて酒あた、めてたべける薪にこそしてんげれ。(中略)かしこへ行幸なつて紅葉を観覧なるに、なかりければ、「いかに」と御たづね有に、藏人そうすべき方はなし。ありのま、に奏聞す。天気ことに御心よげにうちゑませ給ひて、「林間暖酒焼紅葉」といふ詩の心をば、それらにはたがおしえけるぞや、やさしうも仕ける物かな」とてかへて御感に預しうえは、あへて勅勘なかりけり。



図11 魚屋北溪「熊野」

狂歌では、雛段の衛士達は、林間に酒を温める代わりに、桃の花の下で白酒を酌み交わす。

第一首の狂歌とあわせて、軍記物『平家物語』の世界を離れ、女子の節句を祝う狂歌となっている。

能楽と狂歌

能楽も摺り物の題材となっている。『摺物』には、「熊野」(作者不明 三番目物)・「猩猩」(作者不明 五番目物)・「箴の梅」(作者不明 二番目物)の三番が見いだされる。

・魚屋北溪画「熊野」(図11)

鶯の歌の徳にやひた出て水をかへる谷川

桃契園真友

桃園連が、北溪に注文した「桃園連番続き」のうちの一枚。「熊野」は『平家物語』巻十に由来し、「熊野、松風、米の飯」という俚諺があるほど人気の高い作品。平宗盛の愛妾熊野は、病気の老母を見舞う許しを得られ

ず、花見の供に随う。村雨に散る花に母の命を想い詠んだ熊野の和歌に、宗盛は、その帰省を許す。

狂歌にみる「歌の徳」は、熊野が詠んだ歌

いかならむ都の春も惜しけれど馴れし東の花や散るらん

を、指すのだろう。氷のようであった宗盛の心も解けたのである。さらに謡いには、熊野の母の手紙の中に「老いの鶯逢ふことも、涙にむせぶばかりなり」とある。鶯は、ここでは熊野自身ともとれる。狂歌は、「熊野」の筋の背景がなくとも十分観賞でき、古典によってさらに重層的な意味合いを与えられている典型である。

図版も忠実に、東山へ花見に行くシテ熊野と花見車が描かれている。

・凌雲亭和海画「猩猩」（図12）

とそ酒にひたす袋の色そへてかほもはつ日のかけハみせけり 守丸改凌雲亭和海

和海は、絵師であるとともに、狂歌の作者でもある。唐の揚子江のほとりに住む孝行な酒売り高風の店に、海中に住む猩猩が来て、酒を飲んで舞い戯れ、尽きることのない酒瓶を高風に与えて祝福する。摺物に相応しい本祝言の一番である。狂歌では、酒は屠蘇酒となり初日影と続き、正月新春のを祝しているが、「猩猩」により一層祝意は深くなる。図柄は「猩猩」専用の笑みを湛えた赤い童顔の面をつけ、赤頭を被り、上着も袴も赤い独特の装束のシテが、扇をかざし、片足をあげて跳ぶ姿を現している。

以上二首は、独立して観賞出来ると同時に、図柄ともども題材とした能の作品にちなむことが看取されるが、表題となつている能の題名は、詠み込まれていない。

これに対し能「簾の梅」に関連する二作品は、能の題名が摺物の表題とはなつていないが狂歌の中に詠み込まれて



図12 凌雲亭和梅「猩猩」

いる。

・菊川英山画「春興」(図13)

長閑さは四方の気色も三方の日も長熨斗と匂ふ梅香
花郷舎秀美

春ことにえびらの梅の咲満て霞のたてや花の魁

松暎舎可然

いつくとも春の光はわかざりのわらやの軒も匂ふ梅

か香 棹歌亭真楳

能楽「箴の梅」は、『田村』『八島』と並ぶ「勝修羅三番」の一つ。源平争乱の折、生田の森の合戦で箴に梅の枝をさして笠印として功名をたてた梶原源太景季の霊が、旅の僧に現れて修羅の苦患を舞い回向を請う。

狂歌は三首とも新春の景物とともに梅を歌っている。第二首が、「箴の梅」と能の題を詠みこんでおり、「たて」「魁」が「箴」の縁語となっている。図柄は第一首に忠実で、長熨斗を乗せた三方と梅の花である。

・八島岳亭画「正月具足開き」



図13 菊川英山「春興」

治まれる御代の具足もけふひらく時代えひらの梅か
かついろ 櫻尋亭枝折

狂歌では、「具足」「かつ」が「籠」の縁語となってい
る。天下泰平の春を祝う趣旨と思われる。図柄は、正月
に飾っている鎧甲である。狂歌に密接な図柄であるが、
能の舞台との関連はみいだせない。

以上、能が狂歌に取り込まれる場合は、その題名を詠
み込んで全く別の内容とするか、もしくは、謡曲の内容
を歌い込み、図柄も舞台を画く、二通りが『摺物』では、
確かめられた。

中国古典と狂歌

次に中国の古典からの出典の例をあげておく。

・魚屋北溪画『蒙求』「呂望」

文王はよき初夢に入りてより他へはなさしとちかふ

呂望子 南亭

『蒙求』は、漢文を学ぶための児童用の教科書として、



図14 魚屋北溪「蒙求 毛寶」

唐代の李翰によって編纂された。上代から南北朝までの書籍に基づく歴史教訓書である。すでに平安時代から日本でも使用されていた。江戸時代は、さらに刊本も編纂され広く知られた書物である。狂歌は、文王が隠逸の賢者呂望を見いだす周知の物語をそのまま語っている。図柄も、釣り糸を垂れる長髯の太公望とその傍らに威儀を正して佇む文王である。狂歌も図柄も、表題に添っている。随って、翻訳の詩としては、独立しがたく解説が不可欠となった。

・魚屋北溪画『蒙求』『毛寶』（図14）

万代の春にけふよりのり出さん亀をいのちの親船にして
 芥々館梅風

一首は『蒙求』に語られる毛寶と白亀の逸話による。晋代の勇将毛寶は、長江のほとり郟城を守っていたが、敵軍に包囲され、多勢に無勢、ついに敗れて城は陥落した。毛寶は、流れに飛び込み自殺を図ったが、子供の頃に救った白亀が、大亀となって現れその背に乗せて対岸

へ渡してくれたことにより救われた。『晋書』によれば、339年に敗死している毛寶であるが、この亀の恩返しは、『蒙求』に収められたため広く知られていた。一首は、『蒙求』の逸話を、そのまま狂歌としており、さらに「万代の春」と祝意を歌っている。大亀に乗った若い武将を画く図柄とともに一作品となっている。

両作品の狂歌は、出典の古典と極めて密接なため、独立した作品としては鑑賞しがたい。出典に忠実な図柄とともに鑑賞され、翻訳の場合には適切な解説が必要な作品といえるであろう。

以上二作品に対し、中国古典から題材を取りながら、より独立性の強い狂歌もある。

・魚屋北溪画「八駿」名馬番続。(図15)

むらさきの霞の手綱春の日のあし毛の駒のかけてのどけき

青松穂久丸

すへらきも千代のためしにひく馬野の子の日の小松鞭にかも似る

西来居

八駿とは、中国古代武王が所有していたとされる伝説上の八頭の名馬の称である。

一首目の狂歌は、「あし毛の駒」と明白に馬を詠み込んでいるが、必ずしも出典の知識を必要としない。さらに、二首目の狂歌は、直接馬には触れていない。舞台も中国を離れ、日本の宮中の風習である子の日の小松引きを主題として「曳馬野」(遠州地方)と地名に馬を織り込み、馬の縁語である鞭を使って題材の馬を暗示している。

一方図柄は、葦毛の馬と大陸風の衣装を纏った人物が描かれており、出典や第一首の内容に近くなっている。

中国古典を出典としながらも、表題以外には、狂歌も図柄も関連性が一見薄く、より詳細な解釈の必要な作品も『摺物』に収められている。

・魚屋北溪画「朱壽昌」(図16)



図15 魚屋北溪「八駿」

春にあふうれしさと花やわらふらむうたのおやてふ
 なにわつのうめ 福海庵浪芳

五十音こ、よかしことかなかくし母字たつぬる春雨
 の宿 福宝園直人

表題「朱壽昌」は、画面上方左に朱印で記されている。

朱壽昌（1014—1083）は、宋代の人。『宋史』
 卷二「列伝第二一五孝義」によれば、幼少時に行方知ら
 ずとなった母親を、官職を捨て長年懸けて尋ねだした。
 元代郭居敬編纂『二十四孝子』の一人として日本にも知
 られていた。第一首の本歌は、『古今集』仮名序におい
 て和歌の六義の第一そへ歌の例としてひかれる歌であ
 る。

なにわつに咲くやこの花冬ごもり今は春べと咲くや
 この花

狂歌は、朱壽昌の母親探索には直接言及していないが、
 「あふ」「うれしさ」「おや」と朱壽昌が老母に会えた歓
 びを暗示している。



図16 魚屋北溪「朱壽昌」

第二首「母字たずぬる」は、狂歌の「仮名反」における父字・母字の母字をさす。五十音図の縦の行を父字で示し横の行を母字で示し、一つの仮名を表す方法である。四方赤良編『狂歌はまのきさ』⁽¹⁸⁾には、以下のように説明されている。

仮名反

一頭字を父字といひ下の字を母字といふ父字堅に行母字横に行父母行合所の字かへし字なりたとへば
 ぐえんじ源氏 ほくえ経ほけきやう くの字父字にてた
 てに行くえの字母字にて横に行合ところの字けの字
 也くえのかへしけといふもしなればぎえんじは具園
 児は原詩補苦役伽右派法華経なり
 しかすかにさすが しの字父字かの字母字 かへしさ
 の字なり。しかするはさす がとなるなり。
 同行ニ父母字ある時は横は父字堅は母字へ反るなり。

第二首も、朱壽昌の母親探索には直接言及しない。「母」

「たつぬる」で、母親探しを、「ここよかしこよ」で探索の困難を暗示している。

一方図柄も、朱壽昌の生きた宋代中国とは全く関係のない摺物製作当時の江戸時代の女性の姿を描いている。当作品においては、表題・狂歌・図柄がさらに日中の古典と相まって一作品をなしている。「仮名反」という特殊な習慣を扱った第二首は、同時代の狂歌師には、当然の理で趣向を理解されたのであろうが、翻訳に際しては解説が必要とされる。

・本歌取りと狂歌

和歌の一種である狂歌が、和歌の技法の一つである本歌取りを踏襲するのは、当然であろう。天明七年（一七八七）写本朱楽管江著『狂歌大体』には、本歌取りにつき次ぎのように記されている^⑩。

一歌は何題にても祝の心あるかよろし本哥をとるとも不吉のうたはとるへからす

『摺物』所収の狂歌もこの教えが守られているであろうか。本歌取りの例は多いが、ここではまず『百人一首』から本歌をとったものを例としてあげておく。江戸時代の『百人一首』普及の証左にもなるからである。

・溪斎英泉画「屠蘇に馬の盃」（図17）

屠蘇いはふ元日二日みかの原わきてめでたき玉の初春 碌碌斎短綆

本歌は、『新古今和歌集』恋一996、『百人一首』撰入歌。

（本歌）みかの原わきて流るるいづみ川いつみきとてか恋しかるらむ 中納言兼輔

本歌の山科泉川北部の地名瓶原は、碌碌斎の狂歌では、元日二日三日と続けるとともに、酒を醸造する瓶（みか）

「根にかへる」の参考として『和漢朗詠集』所収出典未詳の次の対句をあげることができる。

花悔帰根無益悔　鳥期入谷定延期　藤滋藤

また、この対句自体が老子「夫れ物は藝藝として、各またその根にかへる」に基づくともされる。⁽²⁰⁾

むすび

摺物が盛んに作られたのは、江戸中期から末期である。

『摺物』所収作品に限った例ではあるが、江戸町人文化の典型の一つとみなされがちな狂歌が、古典文学ひいては、上方および宮中の文化と深い関連性を持っていることは、確かめられたのではないだろうか。摺物製作当時、儒学の影響により中国古典の浸透が進み、国学の興隆により日本古典への関心がたかまっていたからであろう。その関連性が、多岐に渡ることも窺えたと思う。

翻訳との関連でいえば、出典との関係が密である場合、物語性の強弱によって一首の観賞の独立性も異なってきた。独立性の高い作品ほど、翻訳した場合解説を要せずに観賞できる。しかし、その背後にある日本や東洋文化からは、離れてしまう危険が伴った。

今回の試みにより、翻訳に際しての出典理解の重要性が再確認され、翻訳の限界を認識したうえで作業のあり方を鑑みる機会となった事を記してむすびとしたい。

なお、参考までに、引用した狂歌のフランス語訳の一部を注の最後に掲げておく。

(1) Textes Geneviève Aitken, Traduction des poèmes Yumiko Takagi. Avec la collaboration de Fondation Jerzy Leszczyc Toshiko Kawakane *Trésors de l'estampe japonaise SURIMONO*, In fine, novembre 2019.

(2) 図柄のみの作品は以下である。

歌川廣重画「飛鶴」・柳々斎辰斎画「紅梅に雪」・八島岳亭画「戦国武将本多忠勝」・葛飾北斎画「雛祭りの飾り」・歌川國貞画「七代目市川團十郎の曾我五郎」(羽子板)。

(3) 『摺物』収録の番組表は以下である。

菱川宗理画「富士田」(図18)

魚屋北溪画「千穂萬歳」(浄瑠璃・長唄・囃子・踊子・義太夫の上演案内)

勝川春英画「番組」富本節

葛飾北斎画「番組」富本節

鳥居清長画「富本総連中催し」。

(4) 歌川廣重画「正月」十七首。・歌川廣重画「七代目市川團十郎の朝日奈三郎」六十六首・鳥居清長画「富本総連中催し」俳諧十八句等である。

(5) 歌川國丸画「踊る子猿」・柳々居辰斎「晴れ着の娘に白兔」(図19)等。

(6) 天明三年四月以降刊・編年月不明普栗釣方編「狂歌知足振」(江戸狂歌本選集刊行会編『江戸狂歌本選集』第十五卷(東京堂出版、二〇〇七年一月二月)参照。同書には編纂者の知るところの以下の連と連中の名称を列記している。小石川連・朱楽連・吉原連・堺丁連・芝連・本丁連・四方連。

(7) 歌川廣重画「正月」。弘化末の春(1847)の作品。

(8) 八島岳亭画「官女に桜」。色紙版縦二枚続きとなっている。

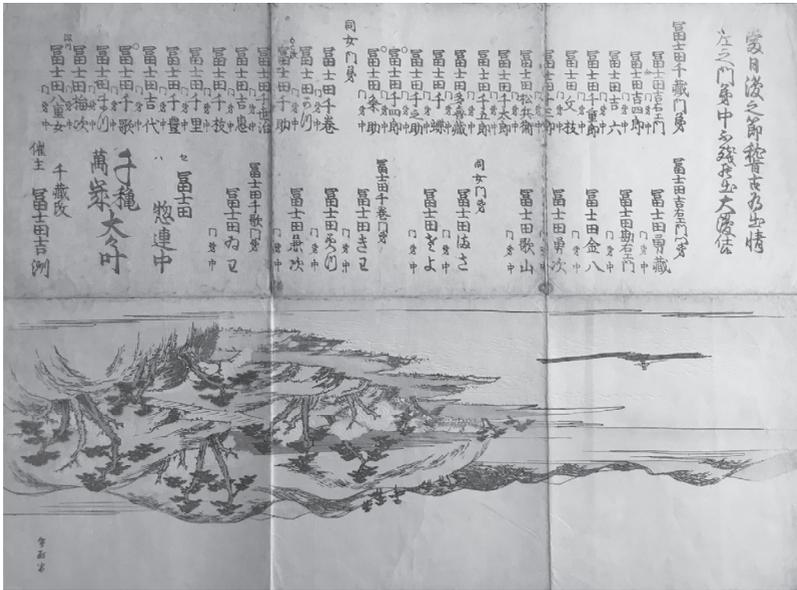


図18 菱川宗理「富士田」

(9)『摺物』に一部のみ収録されている組み物は以下である。

八島岳亭画「久方屋古市をどり」。五枚組の内一枚が、収録。
 魚屋北溪画「三国志」。「京」「桃園結妓」。江戸・京・大坂の名妓を比べた三枚一組の内「京」のみが収録。

魚屋北溪画「花見五番統」。男子一名女子四名による花見の図。

五枚一組の内、男子と女子二名計三枚が『摺物』に収録。

二代目葛飾戴斗画「鳥追歌」。雪月花三枚組みの内雪一枚が収録。
 録。

歌川豊國画「五代目瀬川菊之丞のうらさと」。二枚組みの内一枚が『摺物』に収録。

葵岡溪栖画「北条時政」。弁財天と二枚一組の内、「時政」のみ収録。

歌川國貞画「七代目市川團十郎」。「見立て役者絵五枚続き春興狂歌摺物」五枚組の内一枚が収録。

(10)「元禄歌仙貝合」は、文政四年(1821)、四方側が、浮世絵師葛飾北斎に依頼した全三十六枚の作品群である。この内『摺物』に蒐集されているのは、以下の八枚である。

「みやこ貝」・「紫貝」・「あわび」・「梅の花貝」・「さくら貝」・「みなせ貝」・「ちくさ貝」・「なでしこ貝」。

(11)文政四年(1821)、「元禄歌仙貝合」の成功に気をよくし



図19 柳々居辰斎「晴れ着の娘に白兎」

二代秋長堂物築・二代森羅亭万象代表とする四方側は、文政五年（1822）、再び浮世絵師葛飾北斎に「馬尽」依頼した。これも全三十枚の作品群である。この内「摺物」に蒐集されているのは、以下の九枚、そのうち最後の三枚は、図柄が続いて一組みとなっている。

「馬蹄石」・「駒鳥」・「初午詣」・「馬貝」・「木馬」・「綿繰馬」・「駒止石」・「御厩河岸」・「駒形堂」。

浅井秀剛「摺物」「元禄歌仙貝合」と「馬尽」をめぐって（浅井秀剛・吉田伸之編『浮世絵をよむ 4 北斎』朝日新聞社一九九八年）参照。

〔12〕「摺物」所収の歌舞伎役者を主題とした作品

歌川廣重画「五代目岩井半四郎のおたふく」

歌川廣重画「七代目市川團十郎の朝日奈三郎」

歌川廣重画「七代目市川團十郎の源太と三代目市川門之輔の千鳥」

勝川春亭画「春詠 草摺引の額」

窪俊満画「三代目板東三津五郎の山川白酒売り」

窪俊満画「三代目中村歌右衛門二代目澤村田之助と吉原の遊女」

窪俊満画「三代目板東三津五郎」

歌川豊國画 「五代目瀬川菊之丞のうらさと」

歌川豊國画 「六代目市川海老蔵の奴」

歌川豊國画 「四代目木場團十郎」

歌川豊國画 「元祖才牛團十郎」

歌川國丸画 「七代目市川團十郎の平景清」

歌川國貞画 「七代目市川團十郎の曾我五郎」

歌川國貞画 「七代目市川團十郎の大伴黒主」

歌川國貞画 「七代目市川團十郎の山賊岩窟の五朗蔵」

歌川國貞画 「三代目板東三津五郎の駕籠かきの治郎実は音宮の靈と五代目岩井半四郎の治郎」

歌川國貞画 「七代目市川團十郎の碓井貞光」

歌川國貞画 「七代目市川團十郎の不動明王」

歌川國貞画 「七代目市川團十郎の曾我五郎」 (羽子板)

歌川國貞画 「七代目市川團十郎の曾我五郎と近江のお兼」

歌川國貞画 「四代目小佐川常与」

歌川國貞画 「七代目市川團十郎」

特に『摺物』にも初代と四代が所収されている初代から七代までの市川團十郎大首絵については、以下の論考を参照にされたい。

工藤いずみ 「歌川豊國筆『摺物市川團十郎舞台台似顔絵について』九州大学リポジット

- (13) 年不明四世絵馬屋額輔著『狂歌人物誌』(江戸狂歌本選集刊行会編『江戸狂歌本選集』第十五卷(東京堂出版、二〇〇七年二月))
- (14) 『摺物』収録以外の岳亭春信画「本朝二十四孝」は、以下である。

「大藏右馬頭頼房 太平記評」・「薩摩福依亮 文徳実録」・「丈部三子 続日本紀」・「小野篁 文徳実録」・「信濃孝児 沙石集」・「伴

直家主 続日本後紀」・「曾我兄弟 曾我物語」・「吉備兄姫 日本紀」・「北条泰時 東鏡」・「左紀氏直氏女 続日本紀」・「仁徳天皇

日本紀」・「養老孝子 十訓鈔」・「後三条院 古事談」・「丹生弘吉 三代実録」・「小松重盛 平家物語」・「日野阿新丸 太平記」。

岳亭春信「本朝二十四孝」に先行して、葛飾北斎も「二十四孝」挿物を製作している。

(15) 服藤早苗『平安朝の母と子』（中公新書、中央公論社、一九九六年九月三十日）。

(16) 古田紹欽「中世禅林における女性の入信」https://www.jstage.jst.go.jp/article/ibk1952/26/1/26_1_1/_pdf/-char/ja

(17) 山田忠雄校訳『櫻史』山田孝雄著（講談社学術文庫、講談社、一一九〇年三月十日）

(18) 江戸狂歌本選集刊行会編『江戸狂歌本選集』第十五巻（東京堂出版、二〇〇七年二月）。

(19) 注（18）既掲書。

(20) 日本古典文学大系73川口久雄・志田延義校注『倭漢朗詠集梁塵秘抄』（岩波書店、一九八一年十一月）
 図版は全てレスコヴィッチ財団提供による。

・フランス語訳の例

もも敷の大宮人も鶯のうたにせはしき春のこのころ

Même les nobles

D'un grand palais

Se pressent

Au chant d'une fauvette

En ces jours de printemps

ふく引にふとり得たるお多福やふえをふかせてふりもよく舞ふ

La "femme du bonheur"

Que j'ai gagnée

A la loterie

Joue de la flûte

Et danse bien

咲るから草むらをすら此花はもつらすをらむさくらかるけさ

Ce matin, nous cueillons

Toutes les fleurs épanouissés

De la plaine

Et aussi

Celles du cerisier

去年以来待こし人の山さくらねにかへらなハ花もうらまぬ

Les cerisier de la montagne attend

Depuis l'année dernière

Si avant son arrivée

Ses fleurs tombent et se font racines

Elles-mêmes le regretteront